江戸時代の旅行書物の移り変わり
― 日本史探究学習の一例として ―

山本　橘香・山口　えり

Changes in Travel Books in the Edo Period
- An Example of Classroom Practice in Advanced Japanese History Class -

Kikka YAMAMOTO and Eri YAMAGUCHI

目次

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．旅行書物の出版
Ⅲ．『江戸名所記』と『江戸名所図会』
Ⅳ．『山城名所記』と『都名所図会』
Ⅴ．おわりに

Ⅰ．はじめに

平成三十年に告示された文部科学省「高等学校学習指導要領」（以下、指導要領）の『歴史総合』や『日本史探求』では、「資料を活用し，歴史の学び方を習得する学習」を取り扱う事項としてあげている[1]。令和四年発行の高校の教科書にも、例えば、「探求学習へのハンドブック」、「歴史探究の方法」、「身近な事象と私たち　現代からの探求」、「歴史へのアプローチ」、「歴史と資料　追求」といったコーナーが設けられ[2]、指導要領でいう「課題を追究したり解決したりする活動を取り入れた授業」の方法が提示されている。

本稿では、これらの事柄を踏まえ、歴史資料を使った授業を行う一例として、江戸時代に刊行された旅に関わる書物（以下、旅行書物）を取り上げたい。「観光」は現在の日本にとって経済効果の大きな産業の一つである。訪日外国人の旅行消費額を国内の製品別輸出額と比較すると、自動車、化学製品に次ぐ額が消費されている[3]。

現在の観光業に至るその発展の歴史を念頭に、日本史の教科書の記述を確認していくと、江戸時代に「庶民の旅も広く行われ」るようになったことが記され[4]、教科書によっては、注に「『江戸名所図会』『摂津名所図会』など、観光案内も兼ねた絵入り出版物もさかんになった」との記述も見える[5]。この観光案内という絵画資料を活用して[6]、江戸時代の旅について関心を持ち、江戸時代の特色を学ぶきっかけとなるような学習方法を模索していきたい。

Ⅱ．旅行書物の出版

観光旅行の歴史をみていくと[7]、一般庶民が旅行に関心を持つきっかけには旅行書物が大きな役割を果たしていた[8]。「名所記」・「名所図会」・「道中記」という名称が明らかな書物に絞って、年代順に旅行書物の刊行状況を確認していくと[9]、室町末期には旅に関わる書物が生まれていたが、多くは 17 世紀後半から出版されている[10]。この背景には、江戸時代における街道や宿駅の整備、紙の生産や印刷技術の向上が挙げられる。また、旅行書物としては、当初は「名所記」が普及したが、やがて「名所図会」が主要な旅行書物となっていき、「道中記」という名称の旅行書物が出版されるようになっていった。旅行書物の出版の増加には、17 世紀後半に湯治、寺社参詣、聖地巡礼といった観光旅行が行われるようになったことが大きい。

これらの三つの旅行書物は、それぞれ次のように定義される[11]。

「名所記」は、江戸時代、各地の名所を紹介することを目的として著わされた書物である。京都・

江戸・大坂・大和などの都市近郊や、東海道をはじめとする街道沿いの名所・旧跡を題材に、その故事・来歴・風俗などを案内記風に叙述し、挿絵を適宜加えて娯楽性と実用性を兼ね備えた書物であった。

「名所図会」は、江戸時代後期以降に盛んに刊行され、寺社・旧跡・地名・景勝地などの由緒来歴や、街道・宿場・河川などの案内を平易に解説し、実景描写の挿絵を多数加えた案内地誌である。挿絵は絵として鑑賞にたえる他に地理的説明図となっていて、名所案内としての役割と至便さが名所記に比べて大きく異なっている。

「道中記」は、江戸時代を中心に刊行された旅行の日記・紀行、または旅路の宿駅・里程・名所・旧跡などを記した旅行用の冊子、ないし案内記の類である。平安時代の『伊勢物語』、『土佐日記』、『更級日記』、鎌倉時代の『海道記』、『東関紀行』、『十六夜日記』、戦国時代の『藤河の記』、『廻国雑記』などが江戸時代に普及し、「道中記」を生み出したとの指摘もある（大島 1957）。このように「道中記」は物語や日記のような要素を含むものも分類されるようである。

本稿の目的は、授業の場における観光案内という絵画資料の活用にある。以下では「挿絵」が「加えられていた」ことが特徴としてあげられる「名所図」と「名所図会」に注目し、その二つの違いについて、江戸時代における旅行書物の具体的な変化を視覚的に確認していくこととしたい。

Ⅲ.『江戸名所記』と『江戸名所図会』

ここでは、寛文二年（1662）に刊行された『江戸名所記』と天保五年（1834）に刊行された『江戸名所図会』を取り上げて比較する。

『江戸名所記』は、京都五条町河野道清によって刊行された江戸の案内所である[12]。著者は、江戸時代前期の仮名草子作家としても知られる浅井了意と言われている。江戸の名所案内記的な旅行書物は数多く刊行されたが、本書はその最古のものである。主として、神社・仏閣を中心に名所めぐりの形で景観・沿革・伝記などを記し、挿絵を加え、和歌などを添える。

『江戸名所図会』は、江戸の書肆須原屋茂平衛・伊八によって出版された、江戸およびその近郊の絵入りの旅行書物である[13]。斎藤幸雄、幸孝、幸成の父子三代によって記された。『江戸名所図会』は、神社・仏閣・古蹟名所を挙げ、その現状・沿革を述べ、全て実地調査に基づいているため細部まで丁寧な描写で描かれている。

比較のため、両者の一巻の目次を列挙する。

『江戸名所記』	『江戸名所図会』
・武蔵国	・日本橋
・江戸御城	・本町通
・日本橋	・神田
・東叡山	・小川町
・牛天神	・飯田橋
・不忍池	・両国
・忍岡稲荷	・霊厳島
・神田広小路薬師	・八町掘
・湯島天神	・築地鉄砲洲
・神田明神	・芝口
・谷中清水稲荷	・愛宕下
・谷中法恩寺	・西久保
・谷中善光寺	・赤羽根
・谷中感応寺	・三田
・新堀村七面明寺	・魚愛
	・白銀
	・芝浦

目次の比較からわかることは、目次の項目としてあげられる場所の規模が異なるという点である。例えば、『江戸名所記』では地域ではなく江戸御城や寛永寺のように、名所をあげているのに対し、『江戸名所図会』では名所ではなく、本町通や神田のように包括的な地域名が項目になっている。『江戸名所記』より『江戸名所図会』の方が、名所以外の描写も含んでいるため、名所から名所への行程がわかりやすい作りになっているといえる。

次に、図 1「『江戸名所記』の「日本橋」」と図 2「『江戸名所図会』の「日本橋」」を比較する。図 1 では、日本橋のたもとを中心に、舟や生活する人々が描かれている。対して、図 2 は、日本橋の両方のたもとが見られる俯瞰図であり、舟や生活する人々をはじめ、河岸蔵や魚市、高札場が描かれている。日本橋の北東側には魚河岸が形成され、賑わいのある商業地であった様子が見て取れる。また、図 1 で描かれていた高瀬舟以外にも、魚を運ぶための小型快速の押送船や屋形船も描か

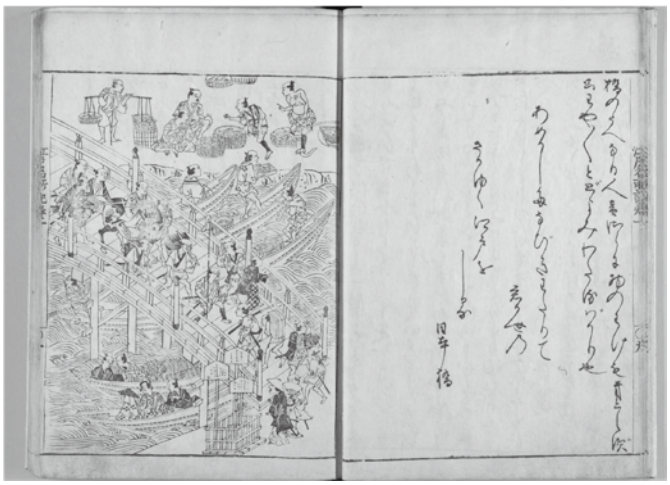

図１　『江戸名所記』の「日本橋」

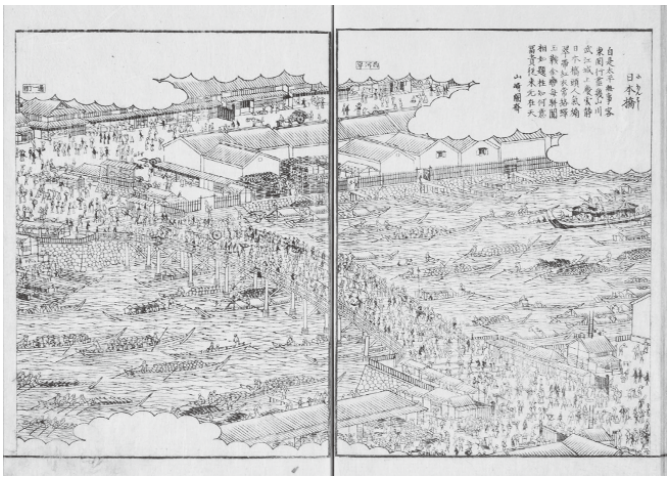

図２　『江戸名所図会』の「日本橋」

れる[14]。

江戸の町人文化である化政文化の最盛期は、文化文政時代（1804 ～ 1830）と言われるが、その後の天保五年（1834）に生まれた『江戸名所図会』の方が、日本橋の賑わっている様子が具体的に描かれていることが確認できた。

Ⅳ.『山城名所記』と『都名所図会』

次に、京都を題材に延宝五年（1677）に刊行された『山城名所記』と安永九年（1780）に刊行された『都名所図会』を取り上げる。

『山城名所記』は、別名を『出来斎京土産』とも言い、浅井了意によるとされる[15]。一見風流読本のような作りになっており、出来斎坊と名乗る庄屋の二番子が、京内参と洛外巡りを行い、各所で下手の狂歌を吟じるという趣向がこらされた内容となっている。

『都名所図会』は、京の最初の名所図会であり、由緒深い寺社は当然のことながら、無名の小祠や、伝説、風俗、年中行事、さらには特産品などについても述べられている。文章は秋里籬島により、挿絵は竹原春朝斎による。詳細な解説や、豊富な鳥瞰図などの挿絵が人気となり、各種名所図会刊行のきっかけとなった[16]。

一例として、東福寺周辺の描写を比較する。図3「『山城名所記』の東福寺」と図4「『都名所図会』の東福寺」は、どちらも東福寺を同じ角度から捉

えている。図３では、三門から五社成就宮を見ると、五社成就宮は浴室よりさらに奥にあり、距離も浴室より遠い印象が強い。一方、図４では、三門から五社成就宮への道の脇に浴室があるという印象を受ける。ここで図５「現在の東福寺」[17]と比較すると、図４の『都名所図会』に見える状況の方が実態に近いと言える。『都名所図会』の方が、絵そのものも詳細に描かれているが、その位置関係もより正確に描かれていることがわかる。

同様に、現在でも京都旅行の観光地の定番といえる清水寺の描写についても確認する。図６「『山城名所記』の清水寺」と図７「『都名所図会』の清水寺」も、両者ともにほぼ同じ画角から描かれている。しかし、後者の『都名所図会』の方が広範囲に俯瞰されている。また、描写の中で最もわかりやすい違いとして表れるのは、両方に描かれている「十一重石塔」であろう。「十一重石塔」は共に「本堂」の右上に描かれている石塔である。図６の「十一重石塔」は、五重塔のような印象を受けるが、図７では、建物ではなくオブジェのような印象を受ける。今、清水寺にある実際の「十一重石塔」は、図７のものとよく似ており、新しく刊行された『都名所図会』の石塔の方が写実的であると指摘できる。

他にも、『都名所図会』の方が、清水寺にそびえる山や、石垣も細かく描かれており、より高低

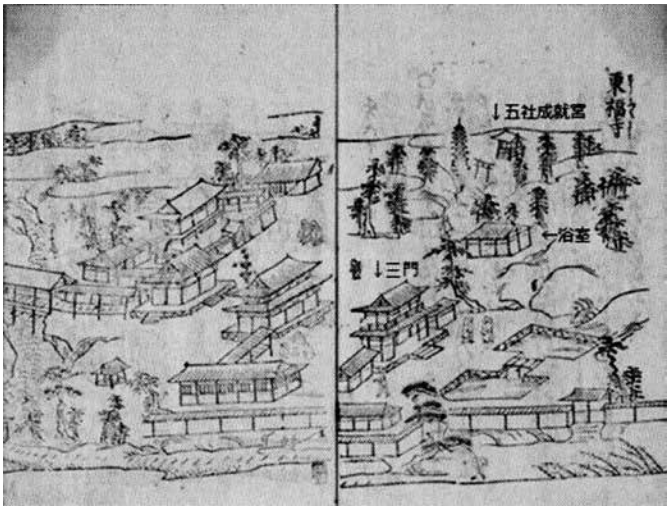

図３　「『山城名所記』の東福寺」

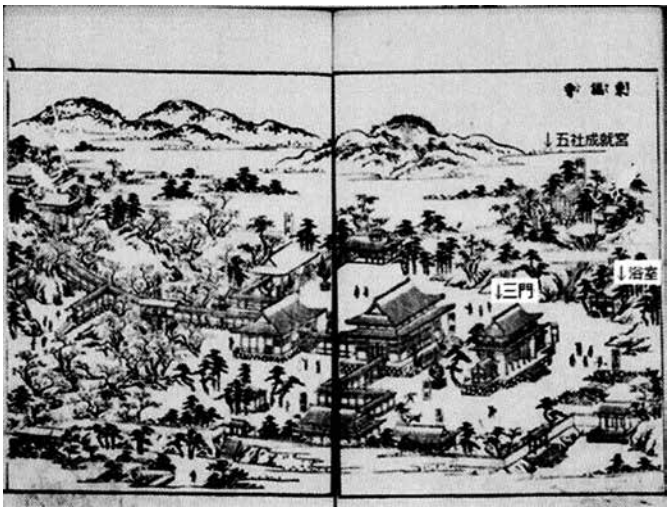

図４　「『都名所図会』の東福寺」

差がわかりやすく描かれている。やはり、実際の清水寺に近い描写であると言える。

書かれている文字も合わせて確認したい。『山城名所記』では「清水寺」意外に、絵の中の建物の上に、説明が文字でふられている。具体的には、図６に、筆者が枠で囲んだ「本堂」と、その右にある「釈迦堂」・「阿弥陀堂」である。図７では、同様に中央の「本堂」、右にある「釈迦堂」「阿弥陀堂」があり、それ以外に、「本堂」の二つ左隣にある「法堂」という文字が見える。他の建造物や石造の「十一重石塔」にも文字で付記されている。このように文字で説明を加えているため、『都名所図会』は『山城名所記』より、情報が多く、観光の参考となりやすいことが確認できた。

図５　「現在の東福寺」

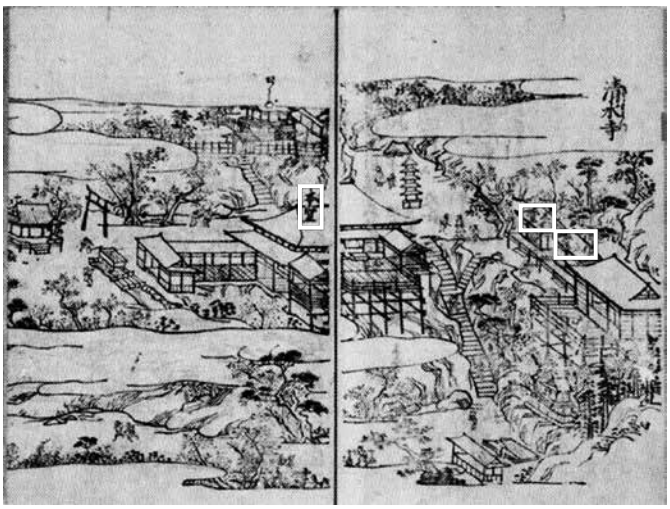

図６　「『山城名所記』の清水寺」

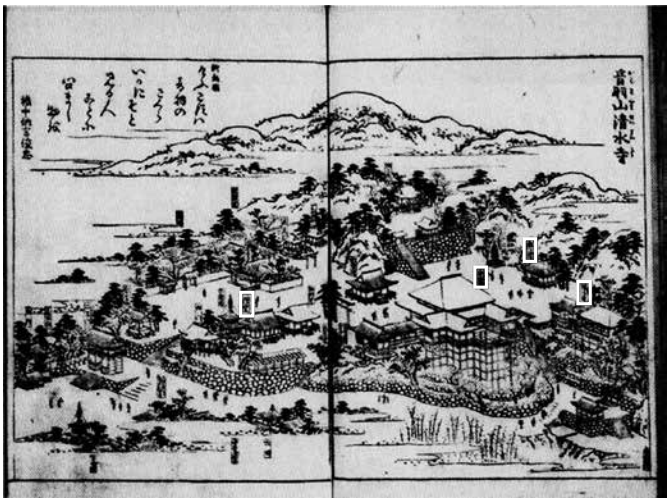

図７　「『都名所図会』の清水寺」

Ⅴ．おわりに

ここまで、『江戸名所記』と『江戸名所図会』、『山城名所記』と『都名所図会』をそれぞれ比較しながら見てきた。同じ地域や名所を題材に取り扱っていても、明確な差異があることが指摘できる。それは「実用性」の問題である。例えば、図の描写が俯瞰的であるか、描写の説明がより具体的であるかという点において、「名所記」から「名所図会」への移り変わりによって、実際に旅に行く際にはより参考になるものとなったと考えられる。

教科書では、このような内容は、「各種の名所案内や旅行記が刊行され、旅日記も多く残されている。こんにちの日本人の観光旅行は、この時期にかたちづくられたのである」と簡潔にまとめられている[18]。グループワーク等を通じて、「名所記」と「名所図会」を見比べ、合わせて現在との隔たりを知る学習は、「資料を活用しながら」「社会的事象を、時期、推移などに着目して捉え、類似や差異などを明確にしたり、事象同士を因果関係などで関連付けたりすること」という指導要領に示された目標を果たす一例となるのではないだろうか。旅行書物の視覚的効果は、時代の変化に伴う旅行記の詳細化のみならず、旅行そのものの質的変化、ひいてはその歴史的背景についても考える機会となる可能性を有していると考える。このような授業の実践を課題として、今後の教育の場に臨みたい。

注

1．文部科学省「高等学校学習指導要領」（平成三十年告示）解説の中でしばしば指摘される。

2．「探求学習へのハンドブック」は『日本史 A』（第一学習社）、「歴史探究の方法」は『日本史 A』（東京書籍）、「身近な事象と私たち　現代からの探求」は『現代の日本史』（山川出版社）、「歴史へのアプローチ」は『詳説日本史 B』（山川出版社）、「歴史と資料　追求」は『高校日本史 B』（実教出版）にあり、具体的な探求学習の方法や、そのあり方の例を示す。

3．国土交通省観光庁「観光の現状について」（令和三年十一月二十五日付）https://www.mlit.go.jp/kankocho/iinkai/content/001461732.pdf （最終閲覧日　2023 年 7 月 31 日）。

4．「民衆文化の成熟」『詳説日本史 B　改訂版』（山川出版社）p 248。

5．「民衆の生活と地方文化」『高校日本史 B　新訂版』（実教出版）p 143。

6．学校教育における絵画資料の活用は、文字のみの資料を提示するより、概して理解を得られやすいため、授業での活用例は本例以外にも多くある。なお、古文書など文字を中心とした史料の授業への活用方法については、風間（2021）より多くの

示唆を得た。

7．観光・旅行については、主に、深井（1997）、宇佐美（2005）、原（2007）、大久保（2009）、溝尾（2009）を参照した。また、国立歴史民俗博物館展示図録（2008）から江戸時代の旅について多くの示唆を得た。

8．初期の旅行案内の歴史については、玉村（2018）が概要をまとめている。

9．国書データベース（https://kokusho.nijl.ac.jp/　（最終閲覧日　2023 年 7 月 31 日））を基に「名所記」「名所図会」「道中記」について時系列で旅行書物の刊行状況を整理し、検討した。ここでは行論の都合上、要点のみを以下に述べる。

10. 古くは室町末期に成立した能登永閑による『永閑伊賀名所記』（『伊賀名所記』とも）がある。

11.「名所記」「名所図会」「道中記」については、大島（1957）、佐々木・平岡（2002）、藤川（2006）、渡辺（2007）、塚本（2008）、鈴木（2021）を参照した。以下の『江戸名所記』・『江戸名所図会』・『山城名所記』・『都名所図会』についても、これらを参照した。

12. 国立国会図書館デジタルアーカイブ（https://www.digital.archives.go.jp/file/1271349.html　（最終閲覧日 2023 年 7 月 31 日））。以下『江戸名所記』についてはこれに依る。

13. ジャパンナレッジ版『江戸名所図会』（https://japanknowledge.com/contents/edomeisho/index.html（最終閲覧日　2023 年 7 月 31 日））。以下『江戸名所図会』についてはこれに依る。

14. 文字情報にも着目すると、『江戸名所記』には「あめかしたなひきわたりて世が君の、さかゆく江戸をしる日本橋」とあり、ますます栄えていく江戸にとって日本橋は重要であることを示唆している。一方の『江戸名所図会』の説明文には「翠帯紅衣つねに絡繹」と「玉鞍金轡つねに駢てんたり」という文があり、人馬が盛んに行き来し、店が建ち並んでいる様子を示す。『江戸名所図会』の方がより説明が具体的と言えよう。

15. 国書データベース（https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100334805/34?ln=ja（最終閲覧日　2023 年 7 月 31 日））。以下『山城名所記』については、別名である『出来斎京土産』で掲載される本ホームページに依る。図の注記は山本が加筆したものである。

16. 国際日本文化研究センター（https://www.nichibun.ac.jp/meisyozue/kyoto/c-pg1.html（最終閲覧日　2023 年 7 月 31 日））。以下『都名所図会』についてはこれに依る。図の注記は山本が加筆したものである。

17. 図 5「現在の東福寺」は、https://map-mania.com/search_results_googlemap?search_key=%E6%9D%B1%E7%A6%8F%E5%AF%BA&s_zoom=16　を元に、山本が図に枠を加筆した。

18.「庶民生活と信仰、旅行」『日本史 B 新訂版』（清水書院）p 137。

参考文献

宇佐美ミサ子（2005）『宿場の日本史』、吉川弘文館。

大久保あかね（2009）「観光史　日本（1）飛鳥時代―昭和時代前期」、溝尾良隆編『観光学の基礎』、原書房。

大島延次郎（1957）「江戸時代における道中記」、『日本交通史論叢』、吉川弘文館。

風間洋（2021）「中世古文書を教材化する試み―新教育課程の歴史科目導入を前に」、『日本史攷究』、45 号。

国書データベース（https://kokusho.nijl.ac.jp/）。

国土交通省観光庁「観光の現状について」（令和三年十一月二十五日付）https://www.mlit.go.jp/kankocho/iinkai/content/001461732.pdf。

国立国会図書館デジタルアーカイブ（https://www.digital.archives.go.jp/file/1271349.html）。

国立歴史民俗博物館（2008）展示図録『旅―江戸の旅から鉄道旅行へ―』。

ジャパンナレッジ版『江戸名所図会』（https://japanknowledge.com/contents/edomeisho/index.html）。

佐々木邦博・平岡直樹（2002）「『江戸名所記』に見る 17 世紀中頃の江戸の名所の特徴」、『信州大学農学部紀要』、38 号。

鈴木章生（2021）「近世の名所記・名所図会：江戸の発展と繁栄を文字と絵に記す」、『悠久』、162 号。

玉村禎郎（2018）「本邦における旅行案内書（1）萌芽期」、『杏林大学研究報告 教養部門』、35 号。

塚本明（2008）「道中記研究の可能性」、『三重大史学』、8 号。

原淳一郎（2007）『近世寺社参詣の研究』、思文閣出版。

深井甚三（1997）『江戸の旅人たち』、吉川弘文館。

藤川玲満（2006）「『江戸名所図会』と『都名所図会』」、『人間文化論叢』、9 号。
溝尾良隆「観光史（2）昭和時代前後以降（1945 ～ 2008）年」、溝尾良隆編『観光学の基礎』、原書房。
文部科学省「高等学校学習指導要領」（平成三十年告示）解説。
渡辺守邦（2007）「名所記から道中記へ」、『国語と国文学』、84-10 号。